



みどりの風

平成26年2月3日発行

校報 第505号

(みどりの風 第48号)

練馬区立関町北小学校

展覧会を前に

校長 大野 泰弘

先月、練馬区小学校連合図画工作展、そして小中連合書きぞめ展が練馬区立美術館にて開催されました。区内の小中学生の力作が所狭しと館内に展示されていました。作品が出品された本人は勿論のこと、ご両親やご家族、また、この時期の展覧会を楽しみにしていると思われる区民の方々が大勢見学にいっしょっていて、館内は熱気に満ちていました。

子どもたちの創意溢れる作品の数々を見ながら、私自身と美術館とのつながりを思い返してみました。そもそも、何十年も生きてきて、私が美術館に足を運んだのは、数えるほどしかないことにあらためて気付きました。以前、何かの記事に、「日本人は美術館や博物館に行って時間を過ごすことが少ない」と書かれていましたが、自分自身を振り返ってみて、全くその通りであると反省しました。

そんな数少ない美術館とのかかわりですが、私には思い出が2つあります。一つ目は、上野公園にある国立西洋美術館だったと思うのですが、生まれて初めてクロード・モネ展を見学し、「睡蓮」という絵を見たこと(折しも、3月9日(日)まで「モネ展」が同美術館で開催中です)、もう一つは、あのモナ・リザが東京国立博物館に来日したとき、僅かな時間ではありましたが、「謎の微笑」に出会うことができた、ということです。いずれも私が中学生か高校生のころだったので、今では正確な記憶としては残っていませんが、その会場で購入した雑誌などをその後もよく見ていたことは思い出せます。

と言っても、私には絵心は全くなく、子どものころから「こんなものを描きたい」と思ってはみても、それが形にはならないもどかしさのみを感じて過ごしてきましたので、モネやダ・ビンチの作品を見ても、ただただ感嘆するだけでしたし、今日、小中学生の作品を見れば、その発想というかユニークな構想力、一人一人の個性を感じさせる色の使い方をはじめ、その感性や表現力のすばらしさに、これもまた感心することの連続です。そこには、子どもたちの力を引き出す美術や造形活動のもつ、音楽とはまた違った魅力が感じられます。

ところで、皆様方にも、それぞれ好きな画家や絵などがおありでしょうが、絵や工作などを鑑賞しながら、子どもたちの心の豊かさにふれることのできる、本校の「展覧会」がまもなく開催されます。校舎内では、校内書きぞめ展も並行して行われています。一人一人の子どもたちが、自由に想像の翼を広げ、豊かな「発想」をもって、自分自身の内面を表現した成果をご覧いただける、3年に一度の機会となります。この展覧会のために、子どもたちは図画工作科や家庭科などで、何か月にもわたって努力を積み重ねてきました。きっと、世界のモネやダ・ビンチ、或いは区内の小中学生の作品を見るとときと共通する、ある種の感動、共感を覚えながら「関北美術館」で至福のひと時を過ごしていただけることと存じます。

子どもたち一人一人の思いや力が見事に「発揮」された展覧会に、ぜひ多数の保護者、ご家族、地域の皆様がお越しくださいますよう、ご来場をお待ち申し上げております。



本校の立体作品です